

韋昭「吳鼓吹曲」について

—孫吳正統論をめぐる—

はじめに

三國時代、曹魏では繆襲、孫吳では韋昭によって鼓吹曲が作られた。この「魏鼓吹曲」および「吳鼓吹曲」は、漢の鼓吹曲をもとに換骨奪胎して、十八曲中の十二曲へ新詞を附し、残りをもそのまま襲用していたとされる（『晉書』卷二十三樂志下）。

増田清秀は三國時代の鼓吹曲について、蔡邕と王先謙が述べる軍樂的性格を肯定し、その性質が晉以後に準據され、強化されていったと述べており、首肯し得る指摘と言える。ただ、増田論文はあくまで漢から晉までの鼓吹曲について總述したものであり、個々の詳細な検討にまで及んでいない。また、松家裕子は、「魏鼓吹曲」の第九曲までほぼ忠實に『三國志』武帝紀の事蹟をたどっていること、繆襲は全體としてリズムを元の歌に沿わせる傾向があることを挙げ、「應帝期」を曹植の「大魏篇」と比して繆襲の曲が遠く及ばぬことを指摘している^②。

一方、韋昭の「吳鼓吹曲」に関する研究は非常に少ない^③。過去、『三國志』の著者陳壽が魏を正統と見なし、南宋の朱熹が蜀漢正統論

を掲げる等々、魏および蜀には正統と見なされた経緯がある一方、孫吳は斯様な扱いを受けることがなかった。孫吳は三國中、正統性から最も遠かった國である。したがって、「吳鼓吹曲」は孫吳の正統性を考えていく上で重要な資料と言えよう。

かかる研究状況および背景を踏まえ、繆襲との比較の中で韋昭の特徴を考え、「吳鼓吹曲」の構成を整理する。本稿は、「魏鼓吹曲」との比較によって、韋昭がいかなる内容・主張を詞に込めたのかを照射するものである^④。

一、鼓吹曲の性質とその作詞者

鼓吹曲の性質について、『宋書』卷十九樂志一に引かれる蔡邕の「禮樂志」には、

鼓吹は、蓋し短簫饒哥なり。蔡邕曰く、「軍樂也。黃帝岐伯の作る所、以て徳を揚げ武を建て、士を勤め敵を諷する也」と。

とあり、「漢鼓吹曲」は簫・饒という吹奏樂器・打樂器を用いて演奏し、軍樂としての性質を有し、また、徳と武威の宣揚を行い、味方の士氣高揚と敵の戰意減退を圖るものであった。したがって、それをも

高橋 康 浩

とにした魏・吳の兩曲もまた同様の性質を有していたと考え得る。事實、後掲する鼓吹曲には軍事的内容がいくつも歌われ、そこには正統性の主張も込められている。金文京は、時間を追って事件を敘述する組曲形式であることを鼓吹曲の特徴の一つに求める。當時各國で鼓吹曲が作成されたことは、その重要性を雄辨に物語る。ちなみに、蜀漢には「蜀鼓吹曲」と言うべきものがない。蜀漢は漢の皇統の繼承者を自稱していたため、「漢鼓吹曲」をそのまま襲用していたと考えられる。蜀漢はその正統性において曹魏・孫吳に比べ、優越する立場にあったと言えよう。これに對して曹魏・孫吳それぞれの鼓吹曲を作成した繆襲・韋昭はいかなる人物であったのだろうか。

繆襲について、注(二)所掲松家論文は、子孫に至るまでの繆氏一族について詳しく觸れている。松家論文を参照しつつ、繆襲について整理していこう。

史書における繆襲の記述はごく僅かであるため、經歷はつまびらかでない。だが、繆襲は「挽歌詩」の作者として知られ、鍾嶸『詩品』では、晉の鼓吹曲を作成した傅玄とともに「下品」に分類されている。『三國志』卷二十一 劉劭傳注引『文章志』に、

(繆)襲字は熙伯。御史大夫の府に辟され、魏の四世に歷事す。

正始六年、年六十にして卒す。子の悦字は孔憚、晉の光祿大夫なり。襲の孫の紹・播・徵・胤等、並びに皆な顯達す。

とあり、中平三(一八六)年から正始六(二四五)年までの六十年の生涯に、曹操・曹丕・曹叡・曹芳の四君に仕えたことがわかる。

繆襲がはじめに仕えた曹操は、もはや機能していなかった漢に代わり政治の實權を握っていた。繆襲は曹操の命によって鼓吹曲を作成したが、第十二曲「太和」では明帝曹叡を歌っており、完成までに長い

期間を要したようである。

一方、韋昭については、『三國志』卷六十五に列傳があり、池田秀三・高橋康浩の專論があるので、ここでは簡略に述べたい。韋昭は建安九(二〇四)年に生を享け、鳳凰二(二七三)年に没するまでの七十年間、繆襲と對を成すかのように孫權・孫亮・孫休・孫皓の四君に仕えた。若年期からの修學と好學な氣質によって磨かれた知識・素養を以て、『國語解』『吳書』『毛詩答雜問』など多くの著述を残した。ことに『三國志』卷六十五 韋曜傳にある「博奕論」は、後世『文選』卷五十二 論二に收められており、彼は名文家としての才能を有していたと言える。しかし、『吳書』の撰定者ということで、史家と評されることが多い。

韋昭の仕えた孫吳は三國時代の脇役とも言える存在であった。國力は曹魏に、正統性は曹魏・蜀漢兩國に劣っていたのである。當初は「漢室匡輔」を掲げて存立の根據としていたものの、それはあくまで漢の補佐という立場での正統性であり、獨立して漢に代わる理論は持たなかった。しかも、獻帝が曹魏に禪讓したことで漢が滅びてしまい、新たな正統理論の確立を迫られていたのである。鼓吹曲はその主張を行う手段の一つであった。

今日、鼓吹曲は「樂府」という文學の一形式として分類される。柳川順子は、孫吳を「文學的不毛の土地」とし、魏が艶麗な五言詩に靡いていたのに對し、吳のそれは『詩經』以來の傳統を持つ四言を主體とする古風な文辭が盛行していたと指摘する。前述したように、繆襲は鍾嶸『詩品』で「下品」に分類される詩人である。これに對して、韋昭は詩人ではなく、むしろ經學者であった。また、韋昭は『毛詩答雜問』という『詩經』に關する著述を残していることから、柳川の指

摘する傾向を有していた典型的人物とも言えよう。ただし、柳川の指摘は「文學」を個人の己むに已まれぬ思いに發する言語表現だと捉え「た上でのものであるため、政治的宣傳という公的性質の強い鼓吹曲に對して當てはめるのは適當でない。また兩者の鼓吹曲としての文學性も一樣ではない。詩人という一面を持つ繆襲に對して、あくまでも經學者たる韋昭の鼓吹曲は、「文學」作品としてだけ見ていくのではなく、むしろ正統性との係わりによって分析していく必要がある。かかる人物的・地域的差異を踏まえつつ、次節より韋昭の著した「吳鼓吹曲」の具體的な内容を曲順に沿って見ていこう。

二、曹魏への對抗意識

軍樂としての性質を有していた鼓吹曲は、當然ながら軍事的内容を詞中に込めた。次の表は『宋書』にみえる「吳鼓吹曲」の題詞と、詞中より想定し得る史實の年代を整理したものである。

曲名	題詞	詞中より想定し得る年代
炎精缺	炎精缺者、言漢室衰、武烈皇帝奮迅猛志、念在匡救、然而王迹始乎此也。漢曲有朱鷺、此篇當之。	一八四年（張角の亂） 一八五年（邊章・韓遂の亂）
漢之季	漢之季者、言武烈皇帝悼漢之微、痛卓之亂、興兵奮擊、功蓋海內也。漢曲	一九〇年（董卓の長安遷都）

通荊門	關背德	克皖城	秋風	烏林	據武師	有思悲翁、此篇當之。第二。	
通荊門者、言大皇帝與蜀	關背德者、言蜀將關羽背棄吳德、心懷不軌。大皇帝引師浮江而禽之也。漢曲有巫山高、此篇當之。第七。	克皖城者、言曹操志圖并兼、而令朱光爲廬江太守。上親征光、破之於皖城也。漢曲有戰城南、此篇當之。第六。	秋風者、言大皇帝說以使民、民忘其死。漢曲有擁離、此篇當之。第五。	烏林者、言曹操既破荊州、從流東下、欲來爭鋒。大皇帝命將周瑜、逆擊之於烏林而破走也。漢曲有上之回、此篇當之。第四。	據武師者、言大皇帝卒武烈之業而奮征也。漢曲有艾如張、此篇當之。第三。	二〇八年（黃祖の擊破）	
二二三三年（蜀・吳の同盟	二一九年（關羽斬首）	二一四年（皖城攻撃）	二一三〜二一六年（合肥・濡須口の戦い）	二〇八年（赤壁の戦い）			

	交好齊盟、中有關羽自失之愆、戎蠻樂亂、生變作患、蜀疑其眩、吳惡其詐、乃大治兵、終復初好也。漢曲有上陵、此篇當之。第八。	再締結
章洪德	章洪德者、言大皇帝章其大德、而遠方來附也。漢曲有將進酒、此篇當之。第九。	二四三年（扶南の朝貢）
從曆數	從曆數者、言大皇帝從籙圖之符、而建大號也。漢曲有所思、此篇當之。第十。	二二九年（孫權の皇帝即位）
承天命	承天命者、言上以聖德踐位、道化至盛也。漢曲有芳樹、此篇當之。第十一。	二五四年（稗草が稻に變化） 二五五年（大石自立） 二六〇年（赤鳥出現） 二六一年（白龍出現）
玄化	玄化者、言上修文訓武、則天而行、仁澤流洽、天下喜樂也。漢曲有上邪、此篇當之。第十二。	（理想社會の提示）

韋昭「吳鼓吹曲」について

韋昭は孫堅期の一八四年頃から孫休期の二六〇年頃までの約八十年間に起こった出来事を詞中に盛り込んだ。内容を分類すると、第一曲から第八曲までは軍事的内容を主とし、第九曲は徳の表彰、第十・十一曲は受命と正統性の主張である。第十二曲はそれらを承けた上での理想社會を提示しつつ、全體をまとめる役割を果たそう。

では、「魏鼓吹曲」と比較しつつ、具體的に内容を検討しよう。「吳鼓吹曲」第一曲「炎精缺」は、漢の衰微と孫堅の武勇を歌う。

炎精缺	漢道微	炎精缺	漢道微
皇綱弛	政徳違	皇綱弛	政徳違
衆姦熾	民罔依	衆姦熾	民は依る罔し
赫武烈	越龍飛	赫たる武烈は	龍飛を越へ
陟天衢	耀靈威	天衢に陟り	靈威を耀かす
鳴雷鼓	抗電塵	雷鼓を鳴らし	電塵を抗げ
撫乾衡	鎮地機	乾衡を撫して	地機を鎮む
厲虎旅	騁熊羆	虎旅を厲まし	熊羆を騁せ
發神聽	吐英奇	神聽を發して	英奇を吐く
張角破	邊韓羈	張角破れ	邊・韓羈がれ
宛頰平	南土綏	宛・頰平らか	南土綏んぜり
神武章	渥澤施	神武章らかにして	渥澤施す
金聲震	仁風馳	金聲震へ	仁風馳す
顯高門	啓皇基	高門に顯らかなりて	皇基を啓く
統罔極	垂將來	罔極を統べ	將來に垂る

「炎精」とは火徳のことで、言うまでもなく漢を指す。漢の威嚴は損なわれ、治安は悪化し、人々は塗炭の苦しみにあった。凋落著しく民を救う力さえない。このような後漢末の混亂をまず描き出す。そこ

に「武烈」こと孫堅が神々しい武勇を奮い、孫吳の基がここよりはじまったと歌いあげる。張角の黃巾の亂は光和七（一八四）年、「邊韓」こと邊章・韓遂の亂は中平二（一八五）年のことである（『後漢書』卷四十八 應奉傳附應劭傳）。この曲は孫堅の武勇を宣揚する一方、漢への挽歌としての側面も持つと言えよう。「炎精缺」には衰微する漢と興隆する孫吳の對比が明確に打ち出されている。

この「炎精缺」は、「魏鼓吹曲」第一曲「初之平」に酷似している。兩曲を比較してみると、その相似が理解できよう。

初之平	義兵征	初めて之れ平ぎて	義兵征く
神武奮	金鼓鳴	神武奮ひ	金鼓鳴る
邁武德	揚洪名	武德を邁め	洪名を揚ぐ
漢室微	社稷傾	漢室微へ	社稷傾く
皇道失	桓與靈	皇道失ひしは	桓と靈と
闡官熾	群雄爭	闡官熾んにして	群雄爭ふ
邊韓起	亂金城	邊・韓起ちて	金城を亂す
中國擾	無紀經	中國擾れ	紀經無し
赫武皇	起旗旌	赫たる武皇	旗旌を起て
麾天下	天下平	天下を麾ぎ	天下平らかに
濟九州	九州寧	九州を濟ひ	九州寧んず
創武功	武功成	武功を創りて	武功成れり
越五帝	邈三王	五帝を越へ	三王を邈ぐ
興禮樂	定紀綱	禮樂を興し	紀綱を定め
普日月	齊暉光	日月を普くして	暉光に齊し

「初之平」も漢の衰微を歎きつつ曹操の武勇を稱える。「神武奮」「金鼓鳴」「漢室微」「邊韓起」等々、魏・吳兩曲で似た表現が散見す

る。また、詞中に邊章・韓遂の名が見えることから、魏・吳の第一曲は、ほぼ同時期のことを歌っている。詞の構成は三字句×三十であり、「炎精缺」も同様である。「漢鼓吹曲」第一曲がわずかに二十五文字であることを考えれば、かかる相似は一方を参照した上で作られたものであろうことを豫想させる。

吳の第二曲「漢之季」もまた孫堅の武勇を扱う。

漢之季	董卓亂	漢の季	董卓亂せり
桓桓武烈	應時運	桓桓たる武烈	時運に應ず
義兵興	雲旗建	義兵興りて	雲旗建ち
厲六師	羅八陳	六師を厲まし	八陳を羅め
飛鳴鏑	接白刃	鳴鏑を飛ばし	白刃を接す
輕騎發	介士奮	輕騎發して	介士奮ふ
醜虜震	使衆散	醜虜震へ	衆をして散せしむ
劫漢主	遷西館	漢主を劫かして	西館に遷るも
雄豪怒	元惡債	雄豪怒りて	元惡債れ
赫赫皇祖	功名聞	赫赫たる皇祖	功名聞こゆ

これは事實上、漢を滅亡させた董卓の亂を歌っている。孫堅は時運に應じて兵を興し、果敢に敵を蹴散らす。「桓桓武烈」は『詩經』周頌・桓篇の「桓桓武王、保有厥土（桓桓たる武王、厥の土を保んじ有つ）を踏まえ、孫堅を周の武王に準えていると見てよい。天子の軍隊を意味する後句の「六師」もまた準えている證左であろう。いずれにせよ、孫堅の武威を稱える句である。「遷西館」とは、初平元（一九〇）年の董卓による長安遷都を指す。董卓の横暴に英雄豪傑たちが怒り、遂に打倒する。それによって孫堅の名が顯れたと結ぶ。

「漢之季」を「魏鼓吹曲」と比較すると、韋昭がいかにそれを意識

して作詞したかが分かる。魏の第二曲「戰荊陽」は荊陽の戦いを歌う。これは本来、曹操が董卓に敗れて馬を失い、従弟の曹洪が自分の馬を與えたことで辛くも難を逃れたという惨めな敗戦である（『三國志』卷九 曹洪傳）。だが、繆襲はそれを巧みに修飾する。

戰荊陽 汴水陂

荊陽の汴水の陂に戦ふ

戎士憤怒 貫甲馳

戎士憤怒し 甲を貫て馳す

陳未成 退徐榮

陳未だ成らざるも 徐榮を退け

二萬騎 塹壘平

二萬騎もて 塹壘平ぐ

戎馬傷 六軍驚

戎馬傷つき 六軍驚く

勢不集 衆幾傾

勢は集まらず 衆は幾ど傾く

白日沒 時晦冥

白日沒し 時に晦冥たり

顧中牟 心屏營

中牟を顧みるに 心は屏營たり

同盟疑 計無成

同盟疑ひ 計は成ることなし

賴我武皇 萬國寧

我が武皇に賴り 萬國寧らかなり

これは終始曹操に不利な展開を歌いながら、最後の一節でまるで勝ち戦のようにすり替えを行っている。「戰荊陽」は敗戦を強引に取り繕って、苦戦しつつも董卓に勝利した曹操の姿を描くものであり、これに對して「漢之季」は果敢に武勇を奮って董卓を打倒する孫堅の姿を描いている。すなわち、直接的な描寫こそないが、韋昭は對董卓戦という同テーマを扱い、曹操と孫堅を對比させようとした意圖を看取できよう。曹操が苦杯を嘗めた相手に孫吳は勝ったのだ、と。續く吳の第三曲「據武師」は、黃祖を撃破したことを歌う。この曲は非常に短い。

據武師 斬黃祖

武師を據らし 黃祖を斬る

肅夷凶族 革平西夏

凶族を肅ち夷げ 西夏を革め平ぐ

韋昭「吳鼓吹曲」について

炎炎大烈 震天下 炎炎たる大烈 天下に震ふ

「炎精缺」「漢之季」で武勇を稱えられ、孫吳の基を創った孫堅は、黃祖の配下に射殺され、三十七年の短い生涯を終える（『三國志』卷四十六 孫破虜討逆傳）。その後、孫吳は孫堅を斃した宿敵黃祖と幾度も交戦し、建安十三年（二〇八）年、「黃祖身を挺して亡げ走り、騎士の馮則追ひて其の首を梟し、其の男女數萬口を虜とす」とあるように、遂に斬首する。馮則なる人物は『三國志』中この一箇所にか名が見えず、黃祖を斬った一事によって正史に名を留めたのである。孫吳が黃祖をいかに敵視したか理解できよう。その宿敵を打倒したことを歌うことにより戦意の高揚を圖るのである。

次の「烏林」は、吳の第四曲目に當たり、曹操を破ったことを歌う。

曹操北伐 拔柳城 曹操北伐して 柳城を抜き

乘勝席卷 遂南征 勝ちに乗じて席卷し 遂に南征す

劉氏不睦 八郡震驚 劉氏睦まじからず 八郡震驚し

衆既降 操屠荊 衆は既に降るも 操は荊を屠る

舟車十萬 揚風聲 舟車十萬 風聲を揚ぐ

議者狐疑 慮無成 議する者狐疑し 成ること無からんかと慮

賴我大皇 發聖明 賴ひに我が大皇 聖明を發す

虎臣雄烈 周與程 虎臣雄烈たりし 周と程と

破操烏林 顯章功名 操を烏林に破り 功名を顯章す

これは建安十三年（二〇八）年の赤壁の戦いを歌ったものである。十萬の曹操軍が南征を開始し、荊州は大混亂に見舞われた。紛糾する孫吳の輿論をまとめあげた「大皇」こと孫權の快刀亂麻ぶりと、周瑜・程普の勇壯さを稱える。赤壁の戦いの時、孫權は周瑜を左都督に、程

普を右都督に任命した。すなわち、両者は司令官であった。この戦いは孫吳史上最大、かつ曹魏を相手に得た軍事的な大勝利である。これを「吳鼓吹曲」が威勢よく歌うのは至極當然であり、最も肝要な曲である。

なお、金文京が指摘するように、「魏鼓吹曲」は十二曲中、赤壁の戦いについて何一つ觸れていない。魏の第四曲は「克官渡」であり、建安五（二〇〇）年の白馬・官渡の戦いにおける大勝を歌っている。曹操はこの戦いで袁紹を破って強大な勢力を形成し、その後の三國時代への流れを決定づけた。繆襲は第二曲「戰祭陽」で敗戦を巧みにごまかしたが、さすがに赤壁での大敗は取り繕えなかつたのであろう。曹操を倒す歌は「烏林」だけではない。第五曲「秋風」と、次に擧げる第六曲「克皖城」もまたそうである。

克滅皖城 遏寇賊 克く皖城を滅し 寇賊を遏つ
 惡此凶孽 阻姦慝 此の凶孽を惡み 姦慝を阻む
 王師赫征 衆傾覆 王師赫として征き 衆は傾覆せり
 除穢去暴 戢兵革 穢を除き暴を去り 兵革を戢む
 民得就農 邊境息 民は農に就くを得 邊境息ふ
 誅君弔臣 昭至德 君を誅し臣を弔ひ 至德を昭らかにす

『三國志』卷四十七 吳主傳に、「建安」十九年五月、（孫）權 皖城を征す。閏月、之に克つ」とある。建安十九（二一四）年、孫權は皖城を攻め落とし、曹操より廬江太守に任命されていた朱光と、參軍の董和を捕虜にした。それによって民は農業に専念でき、邊境は安寧を迎える。第四く第六曲は立て續けに曹魏を破る歌であり、韋昭の曹魏への強い對抗意識を窺い得る。

鼓吹曲は武威の宣揚を行う一方で、徳の宣揚も行った。吳の第九曲

「章洪徳」がそれである。

章洪徳 邁威神 洪徳を章らかにし 威神を邁む
 感殊風 懷遠鄰 殊風を感ぜしめ 遠鄰を懷く
 平南裔 齊海濱 南裔を平らげ 海濱を齊ふ
 越裳貢 扶南臣 越裳 貢ぎ 扶南 臣たり
 珍貨充庭 所見日新 珍貨庭に充ち 見る所日び新たなり

軍事的内容も含まれているが、むしろ『宋書』の題詞が述べるように、孫吳の徳による他國の歸順を表彰した歌である。『後漢書』卷八十六 南蠻傳に、「交阯の南に越裳國有り」とあり、越裳は今のベトナム中部に當たる。しかし、越裳が孫吳へ朝貢に來たという記事は『三國志』中に見えない。一方、扶南王の朝貢は、「赤烏六年」十二月、扶南王范旃 使を遣はして樂人及び方物を獻ぜしむ」とある。したがって、詞中より赤烏六（二四三）年の史事を確認できるが、吳・蜀の再同盟を歌った第八曲が黃武二（二二三）年で、孫權の即位を歌う第十曲が黃武八（二二九）年という年代配列を考慮すると、越裳の朝貢はこの間にあった可能性を推測し得る。おそらく、「章洪徳」は他國の歸順・朝貢をひとまとめにして歌った曲であろう。

以上、いくつかの曲を見てきたが、第一曲に顯著であった鼓吹曲の年代起點・使用語句・句構成をはじめとする相似、および第二曲における對董卓戰をテーマにした描寫の相違、第四曲の軍事的な大勝利のテーマ等々、魏・吳兩曲には相似と對比が瞭然であった。では、かかる結果の理由は何處に求められるのであろうか。

その解は時間的觀點より求め得る。『晉書』卷二十三 樂志下に、魏の命を受くるに及び、其の十二曲を改め、繆襲をして詞を爲り、述ぶるに功徳を以て漢に代へしむ。……是の時、吳も亦た章昭を

して十二曲名を制し、以て功德・受命を述べしむ。

とある。「是の時」という記述により、一見魏・吳が同時期に歌の應酬していたように捉えられる。だが、繆襲と韋昭の生涯は約二十年開いており、韋昭が鼓吹曲を奏上した孫休期（在位二五八～二六八）に、繆襲はすでに世を去っている。すなわち、「吳鼓吹曲」は魏よりも成立が遅く、韋昭は「魏鼓吹曲」を踏まえつつ、それに反撃する形で作詞したのである。でなければ、ここまでの表現上の相似や内容上の對比が生じる豫地はあるまい。時間的なずれと韋昭の強い對抗意識が相似や對比を生み出したのである。

二、正統性主張における相違

一で述べたように、鼓吹曲には武と徳を表彰するだけでなく正統性の主張も含まれていた。それらは第十曲・第十一曲より看取でき、同時に、二で指摘した韋昭の對抗意識も窺い得る。まずは「魏鼓吹曲」から見てゆく。

應帝期

帝期に應ず

於昭我文皇

於昭かしき我が文皇

數承天序

曆數は天序を承け

龍飛自許昌

龍の飛ぶこと許昌よりす

聰明昭四表

聰明は四表に昭らか

恩徳動遐方

恩徳は遐方を動かす

星辰爲垂耀

星辰 爲に耀を垂れ

日月爲重光

日月 爲に光を重ぬ

河洛吐符瑞

河洛は符瑞を吐き

草木挺嘉祥

草木は嘉祥を挺む

韋昭「吳鼓吹曲」について

麒麟步郊野

麒麟は郊野を歩み

黃龍遊津梁

黃龍は津梁に遊ぶ

白虎依山林

白虎は山林に依り

鳳皇鳴高岡

鳳皇は高岡に鳴く

考圖定篇籍

圖を考へ篇籍を定め

功配上古羲皇

上古の羲皇に功配す

羲皇無遺文

羲皇に遺文無く

仁聖相因循

仁聖 相ひ因循す

期運三千歲

期運三千歲

一生聖明君

一たび聖明なる君を生ず

堯授舜萬國

堯は舜に萬國を授け

萬國皆附親

萬國皆な附親す

四門爲穆穆

四門は爲に穆穆たりて

教化常如神

教化は常に神の如し

大魏興盛

大魏興盛し

與之爲鄰

之と鄰を爲す

魏の第十曲「應帝期」は文帝曹丕の即位を歌う。總明さと徳を稱え、麒麟・黃龍・鳳凰など多くの瑞祥が現れる。同時に注目すべきは「堯授舜萬國」という一節で、繆襲は堯舜の禪讓劇を詞中に込めたことにある。續く「四門爲穆穆」は、『尙書』舜典の「賓于四門、四門穆穆（四門に賓せられて、四門穆穆たり）」を踏まえている。堯の末裔たる火徳の漢が、舜を典範とする土徳の曹魏へ禪讓したことを諷諭しているのである。そして、古の帝王に匹敵するほど興隆したと曹丕を稱えて結ぶ。

曹魏の正統理論はここに集約されている。「應帝期」は禪讓と瑞應

によって正統性を主張した。禪讓は曹魏の正統理論の中でも多くの比重を占め、鼓吹曲に限らず用いられた。「緯書や瑞應は、堯から舜への革命に漢魏革命を準備することを俟って、はじめて十全にその正統性を保障し得る」という渡邊義浩の指摘は「應帝期」にも當てはまる。

「文學」的觀點から見れば、確かに注(二)所掲松家論文の述べる如く、繆襲の詞は曹植に遠く及ばぬかも知れない。だが、鼓吹曲は軍樂である。十全な正統性の込められた「應帝期」が彼我に與える影響は大きいであろう。漢魏禪讓という正統理論を持ち得たことは曹魏にとって大きな利點であり、その利點を詞中に反映させていたのが「應帝期」である。

かかる主張に對し、韋昭はいかなる詞を紡いだのであろうか。「吳鼓吹曲」第十曲は、孫權の即位を歌う。

從曆數

於穆我皇帝

聖哲受之天

神明表奇異

建號創皇基

聰叡協神思

德澤浸及昆蟲

浩蕩越前代

三光顯精耀

陰陽稱至治

肉角步郊畛

鳳皇棲靈囿

神龜游沼池

曆數に從ふ

於穆はしき我が皇帝

聖哲は之を天に受け

神明は奇異を表す

號を建てて皇基を創り

聰叡は神思に協ふ

德澤は浸く昆蟲に及び

浩蕩して前代を越ゆ

三光は精耀を顯らかにし

陰陽は至治を稱ふ

肉角は郊畛を歩み

鳳皇は靈囿に棲み

神龜は沼池に遊び

圖讖副文字

黃龍觀鱗

符祥日月記

覽往以察今

我皇多噲事

上欽昊天象

下副萬民意

光被彌蒼生

家戶蒙惠賚

風教肅以平

頌聲章嘉喜

大吳興隆

綽有餘裕

圖讖は文字を摹す

黃龍は鱗を觀し

符祥の日月をば記せり

往を覽て以て今を察す

我が皇噲事多し

上は昊天の象を欽み

下は萬姓の意に副ふ

光被すること蒼生に彌く

家戶は惠賚を蒙る

風教は肅として以て平らか

頌聲は嘉喜を章らかにす

大吳興隆し

綽として餘裕有り

「從曆數」には「應帝期」と類似した構成・語句が用いられている。「先に漢歌の「有所思」の遺聲を多少變更して「應帝期」の新詞を填めたものに、後ほど吳の「從曆數」の曲が、魏曲のそれに協調したからである」と、注(二)所掲増田論文は述べる。この曲には「應帝期」同様多くの瑞祥が出現する。「應帝期」が「麒麟」「白虎」につくるのを「從曆數」では「肉角(麒麟のこと)」「神龜」につくるなど、細かな差異こそあれ概ね一致する點に、やはり對抗意識を窺い得る。續く「黃龍觀鱗」とは、黃武八(二二九)年の黃龍出現を指し、これを機に孫權は帝位に即いて黃龍と改元したのである(『三國志』卷四十七 吳主傳)。

「應帝期」が堯舜禪讓に漢魏禪讓を準備していたのに對し、「從曆數」の當該箇所では「光被彌蒼生 家戶蒙惠賚」となっている。これは漢

然とした徳治による結果を歌っているに過ぎない。孫吳は漢魏禪讓に對抗し得る正統理論を持たなかったため、このような抽象的表現に逃げるしかなかったたのである。

しかしながら、韋昭も對抗する。それが第十一曲に看取できる。魏・吳どちらも「漢鼓吹曲」の「芳樹」を踏襲している。まずは「魏鼓吹曲」から挙げてみよう。

邕熙 君臣合徳 邕熙して 君臣徳を合し

天下治 天下治まる

隆帝道 帝道を隆んにし

獲瑞寶 瑞寶を獲

頌聲竝作 頌聲竝び作りて

洋洋浩浩 洋洋浩浩たり

吉日臨高堂 吉日に高堂に臨み

置酒列名倡 酒を置きて名倡を列ぬ

歌聲一何紆餘 歌聲一に何ぞ紆餘たる

雜笙簧 笙簧を雜へ

八音諧 八音諧ひ

有紀綱 紀綱有り

子孫永建萬國 子孫は永へに萬國を建て

壽考樂無央 壽考樂しみて央くること無し

「邕熙」とは、和らぎ樂しむさまをいう。君臣が和して天下が治まり、皆が樂しむ様子を詞中より窺い得る。前曲「應帝期」での曹丕即位を承けた上で理想社會を提示し、それが子々孫々まで永續することを歌う。

對する吳の第十一曲は「承天命」である。韋昭がこの曲に附した詞

は、魏曲に比して體裁も内容も大きく違ふ。

承天命

於昭聖徳

三精垂象徳

符靈表

巨石立

九穗植

龍金其鱗

烏赤其色

輿人歌

億夫歎息

超龍升

襲帝服

躬淳懿

體玄默

夙興臨朝

勞謙日昃

易簡以崇仁

放遠讒與慝

擧賢才

親近有徳

均田疇

茂稼穡

審法令

定品式

天命を承く

於昭かしき聖徳

三精象を垂れ

符靈徳を表す

巨石立ち

九穗植つ

龍は其の鱗を金にし

烏は其の色を赤くす

輿人歌ひて

億夫歎息す

龍升を超へ

帝服を襲ぐ

淳懿を躬け

玄默を體く

夙に興きて朝に臨み

勞謙して日昃く

易簡にして以て仁を崇び

讒と慝とを放遠す

賢才を擧げて

有徳を親しみ近づけ

田疇を均へて

稼穡を茂くす

法令を審かにして

品式を定む

考功能 考能を考へて

明黜陟 黜陟を明らかにす

人思自盡 人は自ら盡くさんことを思ふ

惟心與力 惟れ心と力と

家國治 家國治まり

王道直 王道直たり

思我帝皇 思ふらくは我が帝皇の

壽萬億 壽萬億ならんことを

長保天祿 長く天祿を保ち

祚無極 祚さいはひ極まること無からん

「邕熙」に比して「承天命」は冗長と云つてよい。詞中の「巨石立」は五鳳二(二五五)年、「九種植」は五鳳元(二五四)年、「龍金其鱗」は永安四(二六一)年、「烏赤其色」は永安三(二六〇)年に出現した瑞祥を指す(『三國志』卷四十八三嗣主傳)。「邕熙」では全く觸れられていない瑞祥が、「承天命」には多く歌われており、これは第十曲で爲し得なかつた反撃を、第十一曲で行つたと言えよう。そして、早朝から日の傾く午後まで公明正大な政治に努めながらも謙虚でいる君主の姿を描き、具體的な施政を列擧する。「勞謙日仄」は、『周易』謙卦の「九三、勞謙、君子有終、吉(九三、勞謙す、君子終り有り、吉なり)」を踏まえたものであろう。

章昭が瑞祥による主張を行った背景には、一で觸れた「漢室匡輔」の破綻があつた。漢魏禪讓によつて輔佐すべき漢が滅び、孫吳の正統性が希薄になつてしまつたのである。その後、孫吳は土徳を主張するものの、火徳の漢より禪讓を受けた曹魏と重複してしまつたため、正統理論の弱さは隠しようもなく、瑞祥に絶することとなる。

孫吳における瑞祥の多さは、小林春樹がすでに指摘しているとおりで、「瑞祥の出現という歴代王朝の手垢にまみれた初歩的な正統理論」こそが正統性の中核を爲していた。「承天命」に見えるような巨石・赤鳥などの他にもいくつか例を擧げてみれば、黃龍(二二二・二二九・二四二・二四八・二六二・二六三年)、甘露(二二二・二二三・二三六・二三九・二四六・二六五年)、鳳凰(二二六・二二九・二七一年)等々、枚擧に暇がない。

しかし、瑞祥が多く出現したところで、それは孫氏の治世を稱えることにはなつても、漢に代わる理論を結局は持ち得ないのである。曹魏が漢魏禪讓と瑞應の二つによつて正統性を強固にし得たのと對照的に、孫吳の正統性は斯様に脆弱であつた。正統理論における劣勢は孫吳の抱え續けた弱點であり、他國に勝る理論を構築できない以上、章昭も頻出する瑞祥に根據を求めざるを得ず、それが「吳鼓吹曲」にも反映したのである。

おわりに

「漢鼓吹曲」をもとにした「吳鼓吹曲」は、漢歌と同様、軍樂にふさわしい武勇の表彰を行つた。章昭は孫堅期の一八四年頃から孫休期の二六〇年頃までの孫吳に起こつた史事、就中、軍事的勝利を詞中に込め、時に「魏鼓吹曲」の句構成・使用語句までを相似させた上で、孫吳の武勇や徳を幾度も稱えた。また、鼓吹曲に含まれる正統性の主張については、漢魏禪讓と瑞應による十全な正統理論を持ち得た曹魏のそれが『尚書』を典據としながら、それを鼓吹曲中にも込めていたことに對して、孫吳は、三國のうちで最も正統理論が希薄であり、決定的なものを持たなかつたため、頻出した瑞祥を根據にして主張せざ

るを得なかった。魏・吳兩曲の比較により浮かび上がったこれらの傾向から、韋昭による曹魏への強い對抗意識を看取できよう。韋昭は『吳書』を著すなど吳の政治的宣傳を行うことに生涯の多くを費したが、結果的に「吳鼓吹曲」は孫吳の正統理論の脆弱性を改めて露呈することとなったのである。

注

- (1) 増田清秀「漢魏及び晉初における鼓吹曲の演奏」(『日本中國學會報』第十七集、一九六五年十月)、『樂府の歴史的研究』、創文社、一九七五年に所収。同論文は、蔡邕の「禮樂志」(注(五)参照)、および王先謙「漢鏡歌釋文箋正」の説を挙げた上で、特に後者の説が牽強附會であることを承知しながら贊同を示している。
- (2) 松家裕子「繆襲とその作品」(『アジア文化學科年報』第一號、一九七八年十一月)。
- (3) 長澤規矩也編『宋書』(汲古書院、一九七一年)に訓讀が施されているもの、邦譯および「吳鼓吹曲」を専論した先行研究は、管見の限り發見できなかった。
- (4) 各鼓吹曲は『宋書』卷二十二樂志四、および郭茂倩『樂府詩集』卷十八鼓吹曲辭三に收められているが、文字の異同があるため、本稿はより古い『宋書』を参照し、中津濱涉『樂府詩集の研究』(汲古書院、一九七〇年)に收められている北京圖書館藏『樂府詩集』の宋本の影印を参考として使った。
- (5) 鼓吹、蓋短簫鏡哥。蔡邕曰、軍樂也。黃帝岐伯所作、以揚德建武、勸士諷敵也(『宋書』卷十九樂志一)。
- (6) 金文京『三國志演義の世界』(東方書店、一九九三年)。また、金文京「日中韓三國の三國志—三つの三國志物語」(『三國志シンポジウム』第

章昭「吳鼓吹曲」について

一號、二〇〇六年二月)も、「漢代の鼓吹曲が一曲ごとに別の内容であったのに對して、三國のものはみな自國の歴史を歌った組曲形式になっている點に特色がある」と述べる。

- (7) 『晉書』卷四十七傳玄傳によると、傳玄は東海の繆施なる人物と『魏書』撰定に携わったとされる。陸侃如『中古文學系年』(人民文學出版社、一九八五年)は繆襲・繆施同一人物説を提示し、滿田剛『三國志正史と小説の狭間』(白帝社、二〇〇六年)もその可能性を指摘する。一方、注(二)所掲松家論文は陸侃如の指摘に根據がないことと、繆襲と傳玄に三十一歳の年齢差があることを鑑みて疑問を抱いている。おそらく繆施は繆襲の一族であり、同一人物ではないと考えられる。
- (8) 文章志曰、(繆)襲、字熙伯。辟御史大夫府、歷事魏四世。正始六年、年六十卒。子悅、字孔憚。晉光祿大夫。襲孫紹・播・徽・胤等、並皆顯達(『三國志』卷二十一劉劭傳注引『文章志』)。
- (9) 池田秀三『國語』章昭注への覺え書(『中國の禮制と禮學』、朋友出版、二〇〇一年所收)、および高橋康浩「章昭『國語解』小考」(『三國志研究』第二號、二〇〇七年七月)を参照。
- (10) 『三國志』卷六十五章曜傳中に見える華覈の助命嘆願書には、「今、(章)曜在吳、亦漢之史遷也(今、(章)曜の吳に在るは、亦た漢の史遷也)」とあり、漢の太史司馬遷に準えられるほどに能力を認められていたことがわかる。また、章昭が注を施した『國語』は『四庫全書總目提要』では史部雜史類に分類され、章昭注自體にも史的傾向が見られる。これもまた「史家」と評價させる一因と言えよう。なお、『三國志』では、章昭を章曜につくる。これは晉の景帝司馬昭の諱を避けたためとされる。
- (11) 渡邊義浩「孫吳政權の形成」(『大東文化大學漢學會誌』第三十八號、一九九九年三月)、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年所收。

(12) 柳川順子「吳の文學風土」(『創文』五〇一、二〇〇七年九月)。

(13) 『宋書』樂志四と釋智匠『古今樂錄』には、固有名詞の表記が異なっているものの、ほぼ同一内容の題詞がある。また、各鼓吹曲の對應表を作ると次のようになる。なお、『三國志研究』第三號(二〇〇八年九月)には、「吳鼓吹曲」と題詞の拙譯が掲載されている。合わせて参照されたい。

漢	魏	吳
朱 鷺	初之平	炎精缺
思悲翁	戰祭陽	漢之季
艾如張	獲呂布	據武師
上之回	克官渡	烏 林
擁 離	舊 邦	秋 風
戰城南	定武功	克皖城
巫山高	屠柳城	關背德
上陵	平南荆	通荆門
將進酒	平關中	章洪德
君馬黃		
芳 樹	邕 熙	承天命
有所思	應帝期	從曆數
雉子班		
聖人出		
上 邪	太 和	玄 化
臨高臺		
遠如期		
石 留		

本文中に挙げた各題詞の訓讀は以下のとおりである。

- 1 「炎精缺」とは、漢室衰へ、武烈皇帝 猛志を奮迅し、念は匡救に在り、然らば而ち王迹此より始まるを言ふ也。漢曲に「朱鷺」有り、此の篇之に當る。第一。
- 2 「漢之季」とは、武烈皇帝 漢の微を悼み、(董) 卓の亂を痛み、兵を興して奮撃し、功は海内を蓋ふを言ふ也。漢曲に「思悲翁」有り、此の篇之に當る。第二。
- 3 「據武師」とは、大皇帝 武烈の業を卒ぎて奮征するを言ふ也。漢曲に「艾如張」有り、此の篇之に當る。第三。
- 4 「烏林」とは、曹操既に荊州を破り、流に従ひて東下し、來りて鋒を争はんと欲す。大皇帝 將の周瑜に命じて之を烏林に逆へ撃ちて破り走らしむを言ふ也。漢曲に「上之回」有り、此の篇之に當る。第四。

5 「秋風」とは、大皇帝 説びて以て民を使ひ、民は其の死を忘るを言ふ。漢曲に「擁離」有り、此の篇之に當る。第五。

6 「克皖城」とは、曹操の志は并兼を圖りて、朱光をして廬江太守と爲さしむ。上親ら光を征し、之を皖城に破るを言ふ也。漢曲に「戰城南」有り、此の篇之に當る。第六。

7 「關背德」とは、蜀將關羽 吳の德に背棄して、心に不軌を懷き、大皇帝 師を引きて江に浮かび之を禽にするを言ふ也。漢曲に「巫山高」有り、此の篇之に當る。第七。

8 「通荆門」とは、大皇帝 蜀と好を交し盟を齊ふるも、中ごろ關羽自失の愆有り、戎蠻 亂を樂しみ、變を生じ患を作し、蜀は其の眩を疑ひ、吳は其の詐を惡めば、乃ち大いに兵を治め、終に初めの好を復するを言ふ也。漢曲に「上陵」有り、此の篇之に當る。第八。

9 「章洪德」とは、大皇帝 其の大德を章らかにして、遠方來附せるを言ふ也。漢曲に「將進酒」有り、此の篇之に當る。第九。

10 「從曆數」とは、大皇帝 籙圖の符に従ひて、大號を建つるを言ふ也。漢曲に「有所思」有り、此の篇之に當る。第十。

11 「承天命」とは、上 聖德を以て位を踐み、道化至盛なるを言ふ也。漢曲に「芳樹」有り、此の篇之に當る。第十一。

12 「玄化」とは、上文を修め武を訓じ、天に則りて行ひ、仁澤流治し、天下喜び樂しむを言ふ也。漢曲に「上邪」有り、此の篇之に當る。第十二。

(14) 『宋書』卷二十一 樂志四では「初之平」につくるが、『樂府詩集』では第一句が「楚之平」とあり、それに伴い表題も「楚之平」となっている。

(15) 兩曲がもとにしたとされる漢の「朱鷺」は次のように非常に短い歌である。

朱鷺 魚以鳥 朱鷺 魚以鳥
路嘗邪 鷺何食 路嘗邪 鷺は何をか食らうや

きい。ちなみに、曲順とは對應していないものの、魏第五曲と吳第六曲、魏第六曲と吳第七曲は總句數が同一である點も注目し置しよう。

(22) 及魏受命、改其十二曲、使纒襲爲詞、述以功德代漢。……是時吳亦使章昭制十二曲名、以述功德受命。(『晉書』卷二十三 樂志下)。

(23) 『宋書』卷十九 樂志一に、「又た章昭 孫休の世に、鼓吹鏡哥十二曲を上るの表に曰く……」とあり、章昭は孫休に鼓吹曲を奏上していたことが理解できる。

(24) 渡邊義浩「三國時代における「公」と「私」」(『日本中國學會報』第五十五號、二〇〇三年十月、『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院、二〇〇四年に所収)。

(25) 「巨石立」および「烏赤其色」については、『三國志』卷四十八 三嗣主傳に、それぞれ「陽羨離里山大石自立」「永安三年春三月、西陵言赤鳥見」とある。また、「九穗植」については、同傳注引『江表傳』に、「是歲、交趾稗草化爲稻」とあり、これを指しているものと考えられる。

(26) 小林春樹「三國時代の正統理論について」(『東洋研究』第一三九號、二〇〇一年一月)。

(27) 渡邊義浩「孫吳の正統性と國山碑」(『三國志研究』第二號、二〇〇七年七月)を参照。

(28) 孫皓の代に、孫吳は金徳である馬の後裔を自稱し、それに基づいて正統理論の構築を行う(注(二七)所掲渡邊論文)。だが、章昭存命時の、ましてや鼓吹曲を作成した孫休期には、漢に代わる正統性を確立できなかった。馬の後裔を自稱したのは、孫吳が曹魏より九錫を受けていたことよって、土徳の魏に代わる金徳の國としての理論を構築しようとしたのである。

(29) 『吳書』の政治的宣傳については、高橋康浩「章昭『吳書』の偏向とその検討」(『六朝學術學會報』第九集、二〇〇八年三月)を参照。